

## ローマ人への手紙第一七回質問

17 「わたしはあなたを多くの国民の父とした」と書いてあるとおりです。彼は、死者を生かし、無いものを有るものとして召される神を信じ、その御前で父となったのです。

18 彼は望み得ない時に望みを抱いて信じ、「あなたの子孫は、このようになる」と言われていたとおり、多くの国民の父となりました。

19 彼は、およそ百歳になり、自分のからだですがすでに死んだも同然であること、またサラの胎が死んでいることを認めても、その信仰は弱まりませんでした。

20 不信仰になって神の約束を疑うようなことはなく、かえって信仰が強められて、神に栄光を歸し、

21 神には約束したことを実行する力がある、と確信していました。22 だからこそ、「彼には、それが義と認められた」のです。

(ロマ四章一七―二二節／新改訳2017)

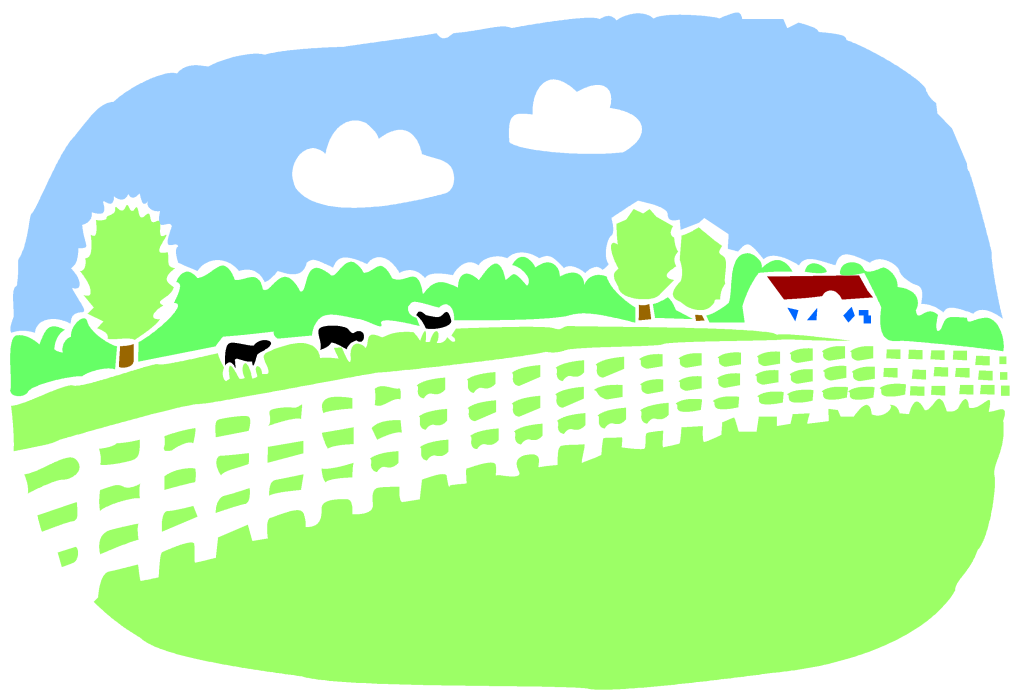
(問一) 17節の約束の動詞は、どんな時制で書いてありますか。  
このことはなぜ大切なのでしょうか。

(問二) この約束は、いつアブラハムに与えられましたか(10、11節)。創世記15章1―6節も参照。

(問三) 18―21節から見ると、アブラハムはその約束にどうこたえましたか。

(グループ聖書研究・聖書を読む会手引より)





## 本当の信仰

(ロマ四章一七一―一二節)

「信仰がなくては、神に喜ばれることはできません<sup>(1)</sup>」と、  
ヘブル人への手紙にしろされていますが、その信仰とはい  
ったいどのような信仰なのでしょう。わたしたちが聖書か

らはつきり教えられることは、どんな宗教であろうと、信仰さえあれば神に喜ばれるというのではありません。聖書ははつきりと、この世界の創造主であられる神を信じる信仰こそ、まことの信仰であると教えています。したがって、それ以外の神を信じる信仰は、偶像礼拝であって、神の最も嫌われるところでは、旧約聖書に教えられている創造主を信じる信仰であれば、それでいいのかと言いますと、決してそうではなく、ユダヤ教やイスラム教の信仰を神は喜ばれるのではなく、キリスト信仰でなければならぬというのが、新約聖書の明瞭な教えであって、これは旧約聖書にも預言という形で教えられているところです。その神に喜ばれる信仰について、実はこの個所が、非常に明快に教えております。

この個所も、アブラハムを例として挙げておりますが、アブラハムの信仰の特徴の一つを、次のような言い方で表わしております。「彼は望みもないのに、なお望みをもって信じた。」ここで言われていることは、直訳すると、「彼は望みに逆らい、望みにおいて信じた」となります。それでは、具体的に「望みに逆らい」とか「望みもないのに」とは、どういうことを指しているのかと言いますと、「アブラハムがおよそ百歳になり、自分のからだが死んだのと同じようになり、サラの胎が死んでしまっていることを認めながらも」ということです。アブラハムは、その子孫が多くなるという約束と、その子孫から救い主が生まれるという約束を早くから与えられていたのに、なかなか子供が与えられませんでした。そのうちに、とうとう年が進んで、彼が九十九歳になり、妻のサ

ラが八十九歳になった時、主が子供の与えられる約束をされました。しかも、一年後に子供が与えられるという約束です。その時、アブラハムは自分たちの置かれている現実を見ました。すると、彼は自分が今もう百歳になんなんとし、「自分のからだが生んだのと同じようになり、サラの胎が死んでしまっていることを認め」ざるをえませんでした。そして彼はこの現実から目をそらしたり、また、この現実を自分の常識で判断して、神の約束をあざ笑うようなこともしませんでした。まず、彼は現実を見すえたのです。そこは、到底、常識が通用するところではありませんでした。自分の無力をいやというほど知らされ、きびしい現実に立ち向かった時、人はいつでも三つの決断のどれかを選びざるをえません。第一は、その現実のきびしさの前にへこたれてしまうというものです。多くの人は、この最も安易な道を選びます。けれども、この道を選んだ人は、あとで事柄が少しも解決していないことを知らなければならぬでしょう。第二の道は、現実のきびしさから逃避するという形で、信仰を選ぼうとするのです。ご利益信仰はみなこのケースです。現実のきびしさには耐えられないための逃避である以上、そこにも本当の解決はありません。第三の道は、現実のきびしさと自分の無力さを認めながらも、神のみことばに信頼し、そこに望みを置くというものです。アブラハムが選んだ道はこれでした。

それでは、このような第三の道のアブラハムが選ぶことができたのは、どうしてだったのでしょうか。彼は、自分自身の無力さと同時に、神の全能性とその約束を果たされること

の確実性、つまり真実性を知っていたからです。「神は、約束されたことを、また成就することができると確信した」のです。ですから、わたしたちが困難な状況に立ちいたった時、そこでへこたれてしまいか、それともそこを乗り越えて行くことができるかは、神をどれだけよく知っているかにかかっていると言っても決して言いすぎではありません。神がどういふ方であるかということがわかっていけば、アブラハムのように、「神は、約束されたことを、また成就することができると確信」することができます。このことは、同時に、アブラハムが「栄光を神に帰し」と言われていることにほかなりません。彼が困難に直面した時、彼の信仰が弱らず、強められた秘訣は、ここににあります。信仰とは、神だけに関心を持ち、神のことをいつも真先に考え、神が現実に生きて働いておられることに心を向け、神をほめたたえることです。

わたしたちが毎日の生活の中で、問題に直面し、そこで困難なことが起こるのは、わたしたちが神について無知であるためです。いざという時、わたしたちの助けとなってくださる神について、いったいわたしたちはどれだけのことを知っているのでしょうか。わたしたちは、もっとよく神を知らなければなりません。そうでないと、ちよつとした問題にぶつかり、すぐ不信仰に陥らないとはかぎりません。

わたしたちが毎日、聖書を読むのは、そのためです。聖書の物語や筋をただ追うようにして、聖書を読むのであれば、それは邪道です。わたしたちが聖書を読む時、それは何よりもまず神を知るためであるべきです。神をよく知らないで、

健全な信仰生活を送れるわけがありません。神をよく知るなら、神が約束されたことを、神はいかに真実に、それを果たされるお方であるかということがわかります。アブラハムの時代には、まだ聖書はありませんでしたから、神を知ろうとするには、神とじかに交わる道しかありませんでした。しかし、今日、わたしたちの場合は、聖書を通して神を知ることができます。そして、その生けるまことの神と交わりを持つのです。聖書を読まずに、ただ祈っていても、知らない神に呼びかけられているすぎません。ですから、わたしたちは聖書と祈りによつて、健全な交わりを持つことができるわけです。

しかも、アブラハムがここで与えられた信仰は、復活の信仰です。それは、キリストの復活を予示している信仰です。このキリスト復活の信仰こそ、彼が義と認められた信仰にほかなりません。パウロは、ここの結論として、次のように言っていることから、そのことは明らかです。「しかし『義と認められた』と書かれているのは、ただ彼のためだけではなく、またわたしたちのためでもあって、わたしたちの主イエスを死人の中からよみがえらせたお方を信じるわたしたちも、義と認められるのである。」

パウロは、ここで神を「死人を生かし、無から存在にまで至らせるように召してくださいるお方」と言っています。「死人を生かす神とは、具体的にキリストを死人の中からよみがえらせ、またわたしたち信じる者を、靈的に死んでいる状態から、靈的いのちを与えて、生まれかわらせ、終わりの日に、わたしたちをキリストと同じように、よみがえらせてく

ださる神ということ。このキリスト信仰がだいじなので

また「無から存在にまで至らせるように召してくださいださるお方」とは、創造主であられる神ということ。『神が一声「光よ出て来い」と言われると、光が出て来た<sup>(3)</sup>』としるされているように、何も存在しないところから、存在に至らせることのおできになる神なのです。しかし、ここでは、もう一つの意味があります。それは「召してくださいださる」と訳されたことばは、「呼ぶ」とか「名づける」という意味があります<sup>(4)</sup>。たとえば、イザヤ書四〇章二六節で、使われている次のような表現に、それを見ることができます。「目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方は、その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもつて、呼ばれる<sup>(5)</sup>。」つまり、神はアブラハムに多くの子孫を与えると約束されましたが、まだその子孫が生まれてこない前に、あたかもすでに存在しているかのように、その名前をお呼びになるというのです。ここに神の全能性と同時に全知性への信仰が、いかになく表明されております。これは、パウロの信仰だけでなく、アブラハムの信仰でもありました。

本当の信仰は、信じる対象をよく知るところから始まります。神がどのようなお方であるかということがよくわかれば、決して「不信仰に根ざして神の約束を疑うようなことはせず、かえって信仰において強められ、栄光を神に帰し、神は、約束されたことを、また成就することができると確信」するのです。信仰は決して思い込みでも、意志の強さでもありません。

ん。神から与えられる賜物です。神がよくわかる時、わたしたちの信仰もおのずと確かなものになっていきます。

注(1)ヘブル人への手紙一章六節 新改訳。

(2)「彼は望みもないのに、なお望みをもって信じた」(四・一八)と訳された文章は、原文のギリシャ語では、次のようになっていきます。ホス・パル・エルピダ・エプ・エルピデイ・エピステウセン (ὁς παρ' ἐλπίδα ἐπ' ἐλπίδι ἐπίστευσεν)。これは、直訳すると「彼は望みに逆らい、望みにおいて信じた」となります。

(3)創世記一章三節 現代訳。

(4)「召してください」(四・一七)と訳されたことは、原語のギリシャ語では、カレオー (καλέω) ということばが使われています。

(5)七十人訳聖書では、カレオー (καλέω) ということばを使っています。

尾山令仁・ローマ教会への手紙講解(ロイドジョンズ・ロマ書講解要約)より

### 【NIV】

Rom 4:17 As it is written: "I have made you a father of many nations." {[17] Gen. 17:5} He is our father in the sight of God, in whom he believed--the God who gives life to the dead and calls things that are not as though they were.

### 【KJV】

Rom 4:17 (As it is written, I have made thee a father of many nations,) before him whom he believed, even God, who quickeneth the dead, and calleth those things which be not as though they were.

